

研究ノート

教育実習の事前指導 P(幼稚園) における 指導案立案時の不足項目の傾向と分析

今里 淳平
山路 千華

Trends and analysis of deficient items when planning instruction in
Teaching Practicum Guidance (Primary School)

IMASATO Jumpei
YAMAJI Chika

1. はじめに

平成29年告示の最新の幼稚園教育要領においては、第4章の「指導計画の作成と幼児理解に基づいた評価」の中で“幼児期にふさわしい生活が展開され、適切な指導が行われるよう、それぞれの幼稚園の教育課程に基づき、調和のとれた組織的、発展的な指導計画を作成し、幼児の活動に沿った柔軟な指導を行わなければならない”⁽¹⁾と、指導計画の基本的な考え方が記されている。さらに指導計画作成上の基本的事項として“幼児期にふさわしい生活を展開し、必要な体験を得られるようにするために、具体的に作成”することとしている。つまり指導計画とは、具体的に作成し、その内容が必要な体験であり、かつ発展的でなければならないということである。また、指導計画における保育のねらいを明確に設定することや、活

動の内容においては適切な環境を構成すること、加えて柔軟な指導が求められている。

保育の指導計画には、長期の指導計画にあたる年間指導計画や月案等と、短期の指導計画にあたる週案や日案等がある。長期の指導計画については、具体的な指導の内容や方法を示しながらも、大筋で捉えることを提唱している。長期の指導計画の作成に当たり、過去の実践の評価や記録を生かし、時期に合った生活の展開が望まれている。また短期の指導計画においては、“長期の指導計画を基にして、具体的な幼児の生活する姿から一人一人の幼児の興味や関心、発達を捉え、ねらいや内容、環境の構成、援助などについて実際の幼児の姿に直結して具体的に作成”⁽²⁾ することとしている。ねらいについて、幼稚園教育要領改訂メンバーであった無藤ら(2019)⁽³⁾は、ねらいは後付けで考えることも提言しているが、ねらいの設定についても、指導や援助同様に柔軟である必要があると言える。

つまり、指導計画とは、長期の指導計画は長期の見通しを持って具体的かつ大筋を捉え、短期の指導計画は子どもの理解、環境構成、援助等の様々な検討事項を吟味し作成するものである。すなわち、保育者の保育における計画力というものが大いに求められていることが分かる。また指導計画においては、子どもの主体性、自主性が重要視されており、幼児一人ひとりの発達や特性を理解することは極めて重要である。保育者は、集団の育ちについても、子ども一人ひとりの育ちについても、その理解を深め、指導計画に反映させていくことが必要となる。特に、日々の保育活動を運営していく短期の指導計画作成の際は、クラスの特性や様子を鑑み、具体的なねらい及び内容の設定する、かつその内容は、子ども達が主体的に参加すること、また自ら活動を発展させることを念頭に置かなければならない。実施後は振り返り、反省課題改善に努め、常に活動に反映していくこととしている。指導計画とは日々計画され、改善されていくものである。つまり保育者は、保育における計画力、子どもへの観察力、視野の広さ、柔軟な援助や指導ができる保育技術力、振り返る力も求められている。ここか

らも分かるように保育者に必要な能力が非常に高いものとなっている。

2. 本研究の問題と目的

保育者は多岐にわたる能力を求められているが、それでは保育者を志す実習生はその能力を獲得するまでに、どのような学びや経験が必要なのであろうか。前章で述べたように指導計画の中でも、学生が保育の場に出て行う実習においては、短期の計画である日案を立案できるようになることが必須となる。保育施設での実習での学びは、現実に目の前に子ども達の存在があるため、子どもと関わりながら、その実態を確かめ、大学で学んだことと繋いでいくという学びが必要である。

白鷗大学の幼児教育・保育コース（以下、幼保コースと記す）では、2年次の1日見学実習（幼稚園）から実習が始まる。3年次に保育実習Ⅰ（保育所）（施設）をそれぞれ11日間ずつ行い、4年次春に初等教育実習（幼稚園）Ⅰを行い、集大成の実習を4年次夏の保育実習Ⅱ（または保育実習Ⅲ）で実習は終了となる。そのような実習経験を経て、学生達は、子どもとの関わりや、保育者の仕事の実際とその役割を学び、指導計画の全体像も掴んでいく。園の考え方を含んだ長期の指導計画の中に、どのように自分の実習の一日が位置を取っていくのかを身をもって学び、短期指導計画である日案、実習生の立場でいえば、「実習指導案」の作成に臨んでいくこととなる。

実習指導案の作成については、学生が苦手意識を持っていることを栗岡(2017)⁽⁴⁾も指摘している。筆者も学生が実習指導案に苦手意識を持っていることは感じている。その苦手意識の根底に、多くの学生が抱える、失敗してはいけない、間違えてはいけない、という評価に直接結びつくことによるプレッシャーがあると考えられる。また、例えば、製作活動であれば、子ども達全員をきちんと参加させなければならないとか、作る作品をきちんとした形で完成させなければならない、などの自己ルールを持ち過ぎて

いるからではないかと、筆者は考えている。実習指導案の作成について、小櫃ら（2015）⁶⁵は、実習生が保育の指導案を立案することの意味には2種類あるとしている。すなわち、「担当する保育を見通しをもって計画的に実践する」という意味と、「保育者が行う保育の計画作成を学習する」という意味がある」の2種類である。

本学でも、各実習の事前指導において、指導案の書き方なども当然、授業内容の中に組み込んでいるが、本稿においては、特に、筆者らが担当する4年次の教育実習Ⅰ（幼稚園）を目指して3年次後期に行われる事前指導での課題に焦点を当て、学生の指導案立案について分析を行うこととする。筆者は、2019年度の教育実習の事前指導P（幼稚園）の課題提出であった製作活動の実習指導案の添削を進めるにあたり、「製作活動の説明」「絵本の読み聞かせ」「手遊び」について、多くの学生に共通した不足項目があった。

本稿では、その共通した不足項目を明らかにすることを目的とし、今後のより良い実習指導のあり方、指導案立案時の指導のあり方に活かしていきたい。

3. 方法

本稿は、授業内で学生から提出された課題を分析したものである。課題提出の詳細は、以下の通りである。

課題提出：2019年12月7日

添削期間：2019年12月7日～同年12月21日

授業名：教育実習の事前指導P（幼稚園）

対象：81名（幼保コース）

内容：教育実習（幼稚園）の事前指導において、課題提出された指導案の分析。

以上のように、指導案の添削後、12月21日の授業において学生に返却し、

内容のフィードバックを行っている。

添削を行った際に、学生の指導案立案についての問題点を抽出し、特に、留意点の書き方について多くの不足が見られた。不足する事項を整理し、①製作活動の説明に関する事項、②絵本の読み聞かせに関する事項、③手遊びに関する事項、の3点に注目し、不足事項の抽出、分析、検討を行う。

4. 結果・分析

（1）製作活動の説明に関する留意点

製作活動における子どもたちへの説明は、保育活動全体の中でも、非常に重要な位置づけにある。これから製作する物と子どもと達との関わりを決定づける大事な場面だからである。製作活動の説明の如何によって、子どもたちの興味や関心、活動への盛り上がりなどが大きく変わってくる。また、次の活動への繋がりにも影響する。しかし、学生の記述を整理すると、製作の説明を行うということは書かれているものの、どのように説明をするかという記述がない学生が半数いたことから、学生にとっては、ややそういった意識が低いことが分かった。

製作活動の説明の記述において、「説明する」としか書いていない学生が42名おり全体の51.9%であった。つまり、説明における留意点がないということは、学生にとって「製作活動の説明」がそれほど重要視されていないということでもある。なお、1名は製作活動の説明に関する記載がなかった。

それでは、「製作活動の説明」において留意点を考えていた学生に目を向けていく。「製作活動の説明」における留意点を書いている学生は38名おり、全81名の学生のうち46.9%であった。留意点の記述内容の内訳を表1に記載する。

表1 製作活動における留意点 38名(46.9%)

留意点	人数
見本を見せながら説明する等	20
手順を描いたもの（イラスト含む）を掲示する等	6
短く話す等	4
おおまかな流れを説明する等	4
ゆっくり話す等	3
簡単に説明する等	3
丁寧に伝える等	3

※複数記述あり

最も多かった記述は、「見本を見せながら、説明を行う（実演含む）」等（20件）であった。学生が考える、「製作活動の説明」における留意点において、見本を見せながら説明を行うことが、最も考えられていることが明らかになった。また、「子どもたちに分かりやすいよう、言葉だけでなく見本を使って説明する」というように、なぜ見本を見せるのかという記述をしている学生もいた。学生が「製作の説明」を行う上で、子どもへの視覚的な理解に訴えるために、見本や教材を見せることが、一番分かりやすいと考えたことが推察できる。

二番目に多かった「手順を描いたもの（イラストを含む）を掲示する」（6件）においても同様のことがいえる。また、手順を書いた紙などを、説明後に保育室の子どもたちの見える壁面などに貼っておくことで、途中の手順が分からなくなった子どもに対しても配慮している学生がいることもわかった。掲示することについては、説明後も子どもたちが見ることができるといふ大きな利点が含まれている。

「大まかな流れを説明する」等（4件）については、子どもたちが完成までの見通しを持ちやすいという点で大事な留意点である。また、「短く話す」等（4件）、「ゆっくり話す」等（3件）、「簡単に説明する」等（3件）、「丁寧に伝える」等（3件）については、子どもたちに分かりやすく

伝えるために必要な留意点である。

（２）絵本の読み聞かせに関する留意点

製作活動前に「絵本の読み聞かせ」を導入として考えている学生は多く、81名中71名が導入として記述をしていた。絵本が学生にとって身近なものとなっていることは、喜ばしいことである。導入のために用意した絵本の種類としては、製作活動に関連した絵本や、年齢、季節に合った絵本が選ばれていた。しかし、71名の学生が絵本を使用するにもかかわらず、その留意点を全く記載しなかった学生は47名おり、「絵本の読み聞かせ」を選択した学生の66.2%は、留意点について考えられていないことが明らかになった。

24名の学生が考えた「絵本の読み聞かせ」の留意点を表2に記す。

表2 絵本の読み聞かせ留意点 24名（33.8%）

留意点	人数
絵本の高さ・絵本の位置に気を付ける等	7
大きな声で読む等	5
子どもの反応を見ながら読む等	5
持ち方に気を付ける等	3
めくり方を工夫する等	3
読み手の立ち（座り）位置等	3
子どもの集まる（座る）位置等	2
絵本の角度の工夫等	2
読む速さの工夫等	2
声のトーンの工夫等	2
読み方の工夫等	2
強弱をつけて読む等	1

※複数記述あり

学生の考える留意点で、最も多かったのは「絵本の高さ・絵本の位置に気を付ける」等(7件)であった。子どもたちにとって、見やすい絵本の高さ、位置について学生が最も留意していることが明らかになった。子ども全員から絵本を見ることができるということを最優先に考えていることが表されている。

二番目に多かった留意点は、「大きな声で読む」等(5件)、「子どもの反応を見ながら読む」等(5件)であった。実習の場では、緊張により声小さくなる実習生も多い。また、「子どもの反応を見ながら読む」等(5件)では、子どもたちに目を向ける視野の広がりについても配慮できていることがわかった。

絵本の読み聞かせは、読み方の工夫により、子どもたちの反応は大きく変わってくる。「持ち方」(3件)、「めくり方」(3件)、「角度」(2件)、「読む速さ」(2件)、「声のトーン」(2件)、「読み方の工夫」(2件)、「強弱をつけて」(1件)等は細かいところだが、読み聞かせの技術を磨いていく上では大切な要素となる。特に、角度については、子どもの低い位置から絵本を見上げた時に、絵本が電気に反射して見えにくくなったり、読んでいるうちにだんだんと角度が上がってしまったりする、意外と見落としがちな留意点が挙がっていた。

(3) 手遊びに関する留意点

「手遊び」を記述していた学生は32名であり、全員が絵本の導入として「手遊び」を考えていた。「手遊び」の準備としては覚えてくるだけであるため、非常に手軽であるといえる。一方で、書籍や楽譜を見てもなかなか覚えられず、実習前には2～3種類の手遊びしか準備できない学生の姿は多く見られる。そして、実習を終えた学生は「もっと、手遊びのレパートリーを増やしておけば良かった」などと後悔の言葉をつぶやいてもいる。

更に、前述したように、絵本の読み聞かせを製作活動の導入としている学生は多く、また、手遊びを絵本の読み聞かせの導入としているところか

ら考えると、「手遊び」というものは、主活動の導入の導入にあたり、あまり留意点が挙げられていなかった実態がある。「手遊び」の留意点が書かれていなかった学生は23名おり、手遊びを行うと記載した32名の71.9%が、その留意点を考えていないことがわかる。

それでも9名の学生は「手遊び」における留意点を表3のように、考えていた。

表3 手遊びにおける留意点 9名 (28.1%)

配慮項目	人数
大きな動きで行う等	3
速さに気を付ける（ゆっくり行う含む）等	2
何回か行う	1
強弱をつけて行う	1
反応を見ながら行う	1
声の大きさに気を付ける	1

※複数記述あり

学生が考える留意点において最も多かったものは「大きな動きで行う」等（3件）であった。子どもたちに分かりやすく行う上で重要なことである。続いて「速さに気を付ける（ゆっくり行う含む）」等（2件）であった。その他、「何回か行う」（1件）、「強弱をつけて行う」（1件）、「反応を見ながら行う」（1件）、「声の大きさに気を付ける」（1件）等が挙げられた。「何回か行う」（1件）については、非常に良い視点である。子どもたちは実習生が準備した「手遊び」を知らない可能性もあるわけだが、新しく教えてもらった手遊びを1回しかやらずに終わってしまっは楽しむことはできないであろう。子どもたちを楽しませるとい点では、「強弱をつけて行う」（1件）、「声の大きさに気を付ける」（1件）といったことも必要である。また、「反応を見ながら行う」（1件）といった子どもの姿を見ることこそ、実習生には必要な経験である。実習生はつい子どもたちに何か

を提供したり教えたりすることに注力しがちだが、本来、保育の中の様々な活動は、子どもが主体でなくてはならない。子どもたちの反応を見ることを考えられる学生は、子ども主体の保育展開となっているかということを見つめ直すことができる学生ということがいえるであろう。

5. 考察

(1) 製作活動の説明における不足項目

製作活動の説明において、留意点がなかった学生はおおよそ半数いた。要因として挙げられるのは製作途中の留意点に比重が傾いたことだと考えられる。やはり学生の中では、作らせることがメインとなり、その途中における手順の説明などは記載があるが、作り始める前の製作活動の説明においては、おざなりになりがちである。小林（2020）も学生が書いた製作の実習指導案について“どのような説明をすることで理解できるなどの、気を付ける点や具体的な方法の記載はない”⁽⁶⁾とし、学生の留意不足を指摘している。小櫃ら（2015）の実習テキストの中でも、“づくり方は具体的に示しながら、子どもたちに分かりやすく伝えることが大切”⁽⁷⁾とし、ここからも製作活動の説明における重要性が窺える。製作活動の説明とは、子どもたちの興味や関心を高め、活動への盛り上がりにつながり、非常に重要な役割である。坂田ら（2020）⁽⁸⁾は、子どもたちが“つくりたい”と思えるかという子どもの心の動きが、活動製作を始めるにあたり、また、活動を豊かにするにあたっての基盤となることを述べている。製作の途中は、子どもたちの進度も異なり、ゆえに、学生の指導も個々への対応が多くなる。しかし、実習後の評価票でも園の先生からの指摘でよく見られる点ではあるが、もっと全体を見回しながら余裕を持った指導が望ましいということが言われる。子どもたちが実際に手を動かし始める前の全体への製作の説明というのは、子ども達に“つくりたい”と思う気持ちを起こし、活動に向けての集中力を高めて子ども主体の活動としていくためのチャンス

なのである。ゆえに、製作途中よりも、全体にむけて、どのような説明ができるかが重要であり、指導案には、必ず書くべき留意点であるといえる。

作るという行為そのものは子どもが行う行動であるため、活動それ自体は、子どもが主体となる活動である。しかしながら、その製作物が、子どもの日々の生活や遊びの中から生まれてきたものではないことが多い。まして、限定的な期間しかいない実習生においては、なおさらであり、どうしても保育者（実習生）から提供するものとなりかねない。そこで、子どもとその製作物との出会いをどのように繋げているのかという架橋のあり方によって、子どもたちが、その製作活動に自分なりの意味合いや必然性を見出すか否かが決まってくるのである。子どもたちがその必然性を見いだせないまま製作に取り組んだ場合、それは、子ども主体の活動とは言えないのである。

一方、製作活動の説明において留意点を記入していた学生に着目すると、多かった留意点として視覚的にわかりやすく説明しようとする配慮点が見られた。製作の活動の場合、個人の進度の差も大きい、それぞれに難しいところなどもある。ここでは、どのように克服するかということ子ども自身が向き合い考える機会が必要である。そのために、視覚的な教材を用いて手順を示したり、動機づけに絵本を使用したりすることで、子どもたちが、その製作物の完成した形をイメージしやすくなり、それに向けての難しいところを克服する術を想像する見通しを持つことができるであろう。そのように、子どもが活動を進めていく姿を具体的にイメージする実習生の想像力や、子どものつまずきへの気付き、完成するまでの保育展開の見通しを持ち立案していることが窺える。少しずつ保育者としての素質が育まれているように感じられる。

（２）絵本読み聞かせにおける不足項目

前章でも述べたように、絵本を製作の導入として計画した学生は多くいたのに対し、その留意点を書くことができなかった学生は47名いた。これ

は、絵本を読もうとした学生の66.2%の学生が絵本の読み聞かせの留意点を書くことができなかったということである。要因として考えられるのは、製作活動の導入としての絵本という位置付けのため、製作活動に留意点のところに、留意点の分量を割いた学生が多かったことが考えられる。季節の製作活動と関連付けた学生が多く、選ばれた絵本のラインナップから察するに、対象時の年齢による理解度や、季節、製作物との関連においても留意したことが窺えた。学生の多くは思いがあって決めた絵本であることは想像に難くない。そのため、その思いを留意点として記載できなかったというのは、非常にもったいないことでもある。

絵本の読み聞かせにおいて、留意点の記述があった学生に着目をしていく。製作活動の説明に関する留意点にも通じるところであるが、学生は、子どもが注目するということを重要視する傾向がある。そのため、絵本の読み聞かせについても、子どもたちから、絵本が見やすいことを留意している。絵本の高さや、持ち方、ページをめくるときのめくり方などは、気を付けようとしている。また、環境構成を考える上での、保育者の立ち位置への考慮など、子どもたちが絵本を見る時の、保育者と子どもの位置関係や目線の交錯点などを具体的に捉えようとしている。学生は絵本を持つことに慣れておらず、持ち手で絵が隠れてしまうことも多い。絵本の持ち方については慣れや練習もあるが、指導案立案時に意識できていると良いであろう。

学生が保育者に一步近づいている証として、「子どもたちの反応を見る」という記載がある。これは、実際に絵本の読み聞かせを行った際に、子どもたちの反応を自分の目で見て、反省や学びが多くあることが想定できる。そういった留意点を持つことで、一步二歩先に保育技術が上がっていくと考えられる。技術的なところでは、声の大きさや速さ等に関する留意点も挙げられた。実習生が実際に絵本の読み聞かせをする際、子どもたちはもちろん、指導にあたっている保育者等、多くの目に見られていることに気が付いた瞬間に一気に緊張をしてしまうということがある。そのため、声

が段々と小さくなったり、速くなったりすることはよくある話である。従って立案時に意識付けすることにより、自分が思っているよりはるかに大きなプレッシャーを感じた瞬間などにも、声を大きく、ゆっくりと読むなどの余裕のある対応が可能になるのではないだろうか。

（3）手遊びにおける不足項目

「手遊び」における留意点を書いている学生は、9名28.1%であった。「製作活動の説明」や「絵本の読み聞かせ」の留意点を書くことができている学生の割合と比べると少ないように感じるが、そもそも、手遊びを保育活動の中に計画した学生が32名と少ない。そのため、留意点についても非常に少ないという結果であった。学生にとっての「手遊び」の価値があまり高くないという実態は、いささか残念である。

吉用ら（2020）⁹⁾は、子どもたちにとって手遊びは、人のまねをしながら自分の感じたままに表現することのできる楽しい遊びであると述べている。手遊びは、自分の手や体のみを使うという特質から、子どもたちが、いつでも、どこでも遊ぶことのできる場所に価値があることも指摘しており、大きな可能性を秘めた遊びということができる。しかしながら、その価値が、学生にはいまいち伝わっていない実態は寂しさもあるが、前章でも述べたように、実習から帰ってくると、学生の中でその手遊びの価値が一変している姿がよく見られる。経験による育ちは大きいと、その学生の姿からも感じられる。

手遊びにおける留意点に記載があった学生に着目をしていくと、大きな動きで行ったり、速さ（ゆっくり）に注意するなど、技術的な記載も見られる。それら技術の先には、子どもたちの楽しんでいる姿が想像できているかが大事で、「反応を見ながら行う」と記載できた学生はたったの1名であったが、手遊びの留意点においては、これら動きと、子どもの反応を見ることが入っていれば充分にも思う。反応を見た先に、どのようなことをするのかまで考えられると良いであろう。その反応を受けて、例えば、

回数を増やして繰り返し行ったり、アレンジして様々なやり方を楽しんだりすると、更に手遊びを通した子どもたちの主体的な表現が発揮されてくるであろう。その当たらない反応から、新たな遊びの展開も生まれることとなり、学生が子ども達から学ぶことは非常に多くあるのである。

このように手遊び一つとっても様々な想定をし、子どもたちが楽しめるよう工夫、留意する必要がある。絵本の読み聞かせの「おまけ」として考えている学生も多いように感じる。一回手遊びを行って子どもを落ち着かせ、絵本に入るという1セットが、学生のイメージの中にあるのではないだろうか。永津（2021）も、「読み聞かせ前は手遊びをする、とパッケージ的に認識されている」⁽¹⁰⁾と述べ、まさに絵本のおまけという認識であることを指摘している。手遊びとは学生が思っている以上に子どもたちの気持ちを高め、その後の活動の参加意欲にもつながる、極めて重要な遊びなのである。保育の場でも、場つなぎ的に行われている手遊び場面も多く見かけるが、本来は、絵本の前のおまけや、ちょっとした空き時間のためのものでなく、子どもたちを楽しませるものということを忘れてはいけない。

学生を実習現場に送る前に、養成校としては、「手遊び」の価値づけを学生に伝えていく必要があるのかもしれない。

6. 総合考察

本稿では、学生が教育実習（幼稚園）に向かう前の事前指導の授業内において、課題として提出された指導案から、学生の指導案立案の問題点について明らかにしてきた。指導案立案の問題点の中でも、圧倒的に学生の記載で不足する箇所は「保育者の指導の留意点である。その不足項目において、①製作活動の説明に関する事項、②絵本の読み聞かせに関する事項、③手遊びに関する事項の3点に焦点を当てた。

この3点に関して、ただ学生が記載した留意点が少ないということだけ

ではなく、「製作活動の説明」で言えば説明をするのみ、「絵本の読み聞かせ」で言えば、絵本の読み聞かせをするのみ、手遊びをするのみ、といったように、行動しか示されていない点が非常に危惧される点であった。この「する」ことに対しての留意点が書かれていないことが、学生の、指導案への苦手意識の根幹に通じるのではないかと考えられる。なぜなら、留意点が書けないということは、その保育者の指導や援助という具体的な行動を、「なぜ行うのか?」「何のためにそうするのか?」「子どもの動きとどのように連動するのか?」という、保育の実践の本質への問いかけが生成されていないということでもある。すなわちそれは、「予測される子どもの姿」への捉えが不十分であることを示してはいないだろうか。

実習生が、子どもの姿を捉えていくには、実際に目の前に子どもがいる、という場での学びが必須であり、それがまさに実習の学びでもある。学内で模擬保育を行う場合、学生が子ども役になって行う「子どもを演じる大人」を対象にすることが多い。そうすると、実際に実習で子どもの勢いに押され、計画通りに指導が進まない状況に直面することとなる。その予測不可能な子どもたちのバイタリティーに学生が向き合った時、初めて本当の意味で、「予測される子どもの姿」が机上の空論ではなく、現実のものとして目の前に現れてくる。それを、実習では、「日々の日誌」として記載していくわけである。本稿では、指導案について取り上げたが、指導案の学びの全段階には、日誌の書き方について学んでいる。学生たちはそのように、「書く」ということが、ただの文字の羅列ではなく、生き生きとした子どもの姿とともに、生きた保育の中身を明文化するものであるということに気が付いていくのである。筆者らは、それぞれ保育の場での保育者としての経験を持つが、実習生がこれまでの学びから実習で得た学びを文字に起こしていくことで苦しんだり、反対に感動したりするさまを見てきた。その頃は、実習生が持つ日誌や指導案への苦手意識の根源を考える余裕はなく、書き方の指導に終始してきたようにも思え、反省させられる。大抵の実習生は、保育者が、助言指導をすれば真摯に受け取め、改善はみ

られる。しかし、苦手意識の根源をたどってみると、学生が本当に感じ、言いたいことというのは、日誌や指導案といった決まった形には現れにくいということが分かってきた。

一方で、本稿では、実習指導案の各活動における留意点を書けている学生の傾向も分析をした。どのような留意点を書いているか抽出し、分類・分析を行った。留意点について細かく見ていくと、子どもの反応を捉えようとしていたり、子どもの目線に立って活動を考えていたりすることが分かった。つまり保育者として必要な観察力や視野の広さを養いつつあることが十分に感じ取られたのである。実習生も、子どもたちと同じように育ちゆく存在であるということを、肝に銘じ、今後の実習指導にも反映させなくてはならないと感じた。

7. 終わりに

本稿では、学生が指導案の立案をする際に、各活動における留意事項が想定不足であることを明らかにし、その不足していた留意事項の検討まで行った。しかし、不足項目の要因の検討や不足項目における効果的な指導法についての検討まで進むことができなかった。そのため、今後の課題として引き続き、不足項目の効果的な指導法について研究を継続していきたい。

前述したが、筆者は保育者として、保育現場で働き、多くの実習生を見てきた。指導案の様式は各養成校によって多少異なったが、軸として環境構成、子どもの活動、予想される子どもの姿、実習生の援助・留意点といった点は、ほぼ同じであった。実習生の多くは細かい流れが書かれており、事前に何案か準備してきたことが窺えた。実習指導案の主活動について、子どもたちの姿を見ずに事前に準備をしているため、明らかに対象年齢が低かったり、逆に高かったりすることもあった。その都度指導を行い、活動の変更や工程の工夫について何度か話し合い、実践に移るようにした。上述したように子どもたちの姿を見る前に、立案をすることで、所謂今の

子どもたちの姿に合っていないという現象が起こる話はよく聞く。しかし筆者はこの現象を悪いこととは思っていない。活動においては、明らかに対象年齢を無視しているようであれば話は別だが、実習生が実習に入り今の子どもたちの姿を見て、一から活動を立案するということは厳しいと考えられる。したがってある程度年齢を捉えた活動、ここからは重要であるが工程に工夫の余地がある活動を何案か、事前に準備を行えばよいのではないだろうか。

実習生が立案した実習指導案で多かった、手遊び、絵本の読み聞かせ、製作活動について不足項目について考察を行っていく。実習生が立案する製作活動の指導案の多くは、細かく工程を書くことができていたが、留意点が少なく、ただつくる製作活動といった形であった。小山（2015）⁽¹¹⁾もこの点を指摘しており、学生が指導案を書く際に「保育者の行動が羅列傾向」にあるとしている。本来子どもたちにとって楽しいはずの製作活動が、作業的につくる製作活動と変わってしまっていた。実習生は実習指導案に作業工程を書き起こすことに必死となり、本来の目的である子どもたちが楽しむということがどこか置き去りにになっている現状があった。製作活動の説明においては、実習指導案に製作の説明をするとは書いていない実習生もいた。そういった学生においては責任実習の事前打合せの中で、製作活動の説明の重要性を伝え、どのようなことに留意し、どのように伝えるかと助言をし、何度か打ち合わせを行った。

絵本の読み聞かせについては、製作活動と関連付けた絵本を選んでいることが多く、中には手作りの絵本を読む実習生もいた。実習生の多くは、絵本選びにおいてしっかり力を入れており、好感が持てた。菅原（2020）は「日本の保育施設では、活動の導入の際に関連する絵本を読んだり」⁽¹²⁾するとしており、実習生においてもその考えが浸透していることが分かった。一方で実践である読み聞かせについて気になることがあった。実習生は、子どもたちや保育者の前に立ち緊張をする、それはある程度必要なことであり、仕方ないことである。緊張のため絵本の読み聞かせの途中で、

嚙んでしまったり、読み間違えることも、仕方ないと筆者は考えている。しかし実習生は、一語一句間違えないように読もうとするあまり、かえって絵本をのぞき込んで、絵本の持ち方が安定しなかったり、正しく読もうとしすぎて、肩に力が入りすぎて間違えてしまうということが多々あった。絵本の読み聞かせについては、多少間違えても、子どもたちが楽しめればいいという気持ちを持って、実習生には少し楽になってもらいたい。

手遊びについて、絵本の読み聞かせの導入として行う実習生が多かった。実習生は実習指導案立案時から手遊びにおける想定や留意点が少なく、実践を行い困っていることが多かった。例えば4歳児クラスで実習生は「はじまるよ」を子どもたちが知らないで手本をゆっくり見せる、子どもたちからは「知ってるよ」ととどめるが、実習指導案に沿い1回ゆっくり手本を見せてから、2回目を一緒に行う。また、子どもたちが知らない手遊びも1回行ったら絵本に移ってしまったり、子どもたちが楽しめきれない、実習生の手遊びも多くあった。子どもたちが楽しめるよう、回数、速さ、アレンジをするといった留意点が必要があった。筆者は実習生の指導案提出時に手遊びの想定不足に気付いていたが、失敗をして気づいてもらいたいという思いがあったため、敢えて伝えることはせず、実施後のその日の反省会には助言や指導を行うようにしていた。学生にとっての手遊びの留意点や想定不足、位置づけを改めて検討する必要があるのではないだろうか。

また、実習生の保育実践というのが、実習園、つまり保育の場における長期的な指導計画の中のどの位置にあるものなのかという位置付けについても、養成校では学生への意識付けをしておく必要があると考えられる。

引用・参考文献

- (1) 文部科学省「幼稚園教育要領＜平成29年告示＞」フレーベル館、2017、p.9
- (2) 文部科学省「幼稚園教育要領」フレーベル館、2018、p.105
- (3) 無藤隆・大豆生田「子どもの姿ベースの新しい指導計画の考え方 新要領・指針対応フレーベル館、2019
- (4) 栗岡洋美「指導案作成の教授メソッド—段階的指導のあり方—」中京学院大学中京短期大学研究紀要（第1号）2017
- (5) 小櫃智子・田中君枝・小山朝子・遠藤純子「実習日誌・実習指導案 パーフェクトガイド」2015、わかば社、p.67
- (6) 小林美花「保育実習における指導案の現状と今後の可能性」北翔大学教育文化学部研究紀要（第5号）2020、p.50
- (7) (5)同書、p.89
- (8) 坂田葵・高橋司「環境要因型製作活動への提唱：子どもの思いがいきる一斉保育の製作活動」（第19号）2020
- (9) 吉用愛子・奥田恵子「保育教材としての『手遊び』に関する一考察」（第40号）2008
- (10) 永津利衣「手遊びの実際と課題—保育実習後のアンケート調査から—」（第1号）2021、p.59
- (11) 小山優子「保育者の力量形成を促すカリキュラムの検討（Ⅱ）—学生の日案作成の習得家庭から—」鳥根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要（第53号）2015
- (12) 菅原航平「絵本に関する保育環境の課題～様々な子どもの発達を促すための絵本活用した保育～」別府大学短期大学部初等教育科・保育課児童学会、初等教育：実践（第44号）2020、p.80

（本学教育学部幼保実習サポート室実習講師）

（本学教育学部講師）